

Title	Tel Quelは何をしたか ( I ) : ソレルスとその周辺をめぐって
Sub Title	Qu'ont fait les telqueliens? ( I ) : autour de Philippe Sollers
Author	阿部, 静子(Abe, Shizuko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.34 (2002. 3) ,p.143- 164
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20020331-0143">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20020331-0143</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# Tel Quel は何をしたか (I)

——ソレルスとその周辺をめぐる——

阿 部 静 子

## 0.0. 1960年

1960年3月、季刊文芸雑誌 Tel Quel 第1号はスイユ社から刊行された。編集スタッフは編集長の J.-E. アリエ以下、ボワルーヴレ、J. クードル、J.-R. ユグナン、R. マティニャン、そして P. ソレルスの6名である。

同じ年の1月、ノーベル賞作家 A. カミュが、ガリマール出版社社長の息子の車でパリに向かう途中、自動車事故死している。46歳の若さだった。同じく1月、パリ大学で開かれたサルトルの講演会には多くの人々が詰めかけたという。時代を象徴するサルトル・カミュ論争から8年後のことである。

一方、カミュの故郷アルジェリアで激しさを増していた独立戦争はこの年、皮肉な展開を見せることになる。10月、M. ブランショが起草したといわれる声明文が出されたが、そこにはアルジェリアの独立を抑え込もうとする戦争は不当な戦争であり、兵士はこれに対する不服従の権利がある、と書かれていた。この声明に署名したサルトルをはじめとする121人の文化人達は、国营放送局などあらゆる国家機関から締め出されるという憂き目に遭っている。しかし翌11月、ドゴール大統領は突然、アルジェリアに独立を与えると宣言したのである。

## 0.1. Review «Tel Quel»

ところで当時フランス出版界には、1908年の創刊以来、知識人のオピニオン・リーダーともいべき役割を果たしてきた NRF 誌 (Nouvelle Revue

Française) と、サルトル率いる Les Temps Modernes 誌等、幾つかの文芸誌が存在していた。こうした状況下、若い Tel Quel 誌は、68年のいわゆる5月革命を経てサルトルの死の2年後、1982年に廃刊されるまで22年間続き<sup>1)</sup>、その後は出版社をガリマール社に移し名前を L'Infini に変えて再発売し、今日に至っている。創刊時のメンバーのうち、残ったのはソレルス唯一人である。

もし Tel Quel 誌が存在せず、ソレルスがいなかったなら今日のフランスの文学事情は違っていたかどうか<sup>2)</sup>、はともかくとして、このフランス文学界の鬼っ子ともいべき雑誌が当時の文学状況においてどの様な役割を果たし(あるいはどの様な役割を果さず)、どの様な存在であったのか(あるいはどの様な存在でなかったのか)、検討してもよい時期にあるのではないだろうか。それは取りも直さず、振り返って現在の文学状況について考えることに他ならないのだから。

1995年3月9日から11日までロンドンで、27日から30日までパリで、Tel Quel 誌と L'Infini 誌をめぐる討論会が開かれた。前者は“The avant-garde, and after” 後者は“De Tel Quel à L'Infini” というタイトルである。時期を同じくして L'Infini 誌の49/50合併号は Tel Quel 誌の回顧を特集し、また Tel Quel 誌の歴史を扱った2冊の本が相次いで出版されている<sup>3)</sup>。

L'Infini 誌合併号の巻頭で、ソレルスは次のような問いかけをしている。

On a beaucoup parlé de *Tel Quel*, en long, en large, à tort, à travers. Qui, pourtant, aura finalement pensé du bien de cette aventure, en dehors de ceux qui l'auront dirigée de l'intérieur jusqu'à sa dissolution en son temps? Personne.<sup>4)</sup>

かつてその若々しいイメージと、常に何かが起こっているかのように読者に思わせる策略によって気になる存在であり続けた Tel Quel 誌——その“aventure” が実際にはどの様なものであったのか探してみたい、という欲求が本稿執筆のきっかけである。

時間軸に沿って、創刊直前の状況を探ることから始め、第1号発刊後、順調に滑り出したかに見える裏で内紛が絶えなかった困難な状況をいかにして乗り越え、時代とどの様に切り結んで生き延びていったか、更にはその後の発展期を経て L'Infini 誌へ引渡しをするまでの足取りを、創刊当初から唯一継続したメンバーであり続けたソレルスを中心にして3回に分けて述べていきたい。その過程で、この雑誌が如何にして「ソレルスの Tel Quel」とも言えるものになっていったかをも明らかに出来るのではないかと思う。

(I) では Tel Quel 誌創刊から順に初期の65年頃までを辿ってみたい。

## 1.0. 2つの出会い

1945年度のルノー賞作家ジャン・ケロールは、作家であると同時にスイユ社の編集者であり<sup>5)</sup>、当時 *Écrire* という雑誌を主宰していた。彼はそこで「若い小説家や詩人が、たとえ出版されることはなくとも、少なくとも自分の原稿を快く読んで貰えると信じて作品を送ることの出来る人がフランス国内に1人はいる」<sup>6)</sup>と言われる存在であったようだ。そして当時まだ本名の Philippe Joyaux であったソレルスはそのケロールに1956年12月に次のような手紙を送ったのである。

Parmi les raisons que j'ai de vous écrire, il me plaît de choisir celle-ci, la plus insignifiante : j'ai 20 ans et je suis bordelais. Bon, direz-vous, mais qu'y a-t-il là qui justifie cette indiscrétion? Hélas, j'ai ce malheur de n'être pas froissé avec la littérature et d'avoir contre moi un informe (mais court!) manuscrit dont j'aimerais savoir les faiblesses.

J'en viens à l'important : mon envie de vous connaître. Et je vous prie bien profondément de ne voir en elle nulle habileté...Si, au risque de ce doute, je vous assure que vos poèmes—et cet admirable cri de *Nuit et Brouillard*—sont pour moi d'une matière très précieuse et très intime, vous pouvez m'en croire sans sourire.

Bien entendu, il serait inélégant de feindre d'ignorer qu'«Écrire» est une tentation. Ne voyez pourtant nulle obstination, nulle mesquinerie dans cette lettre. Avant tout, il me semble que j'ai grand besoin de sympathie ou, à défaut, de conseils.

Oserai-je me recommander de M. François Mauriac qui me fait l'honneur de me connaître?<sup>7)</sup>

婉曲な言回しと挑発的なニュアンス——この手紙は文体、内容ともにソレルスの挑戦そのものであるとも言えよう。そして未来の恩人の意見を仰ぐべく送り届けた作品(“un informe manuscrit”)の題名が奇しくも『挑戦』(Le Défi)であった。同郷ポルドー出身の作家モーリャックとの知遇を得ていることをちらつかせる手管——一通の手紙を際だたせているこれらの特徴はそのまま、後のソレルス作品の顕著な特徴ともなるものである。一方では次第にソレルスを中心に展開していくようになる Tel Quel 誌そのものも、こうした特徴を自らのものとするようになっていくのである。

J. ケロールは送られてきた原稿を Écrire 誌 3 号に掲載すべく、作者の母親に許可を求める電話をかけた。Joyaux は当時 20 歳、親の許可が必要だったのである。一方、母親の反対を見越していた Joyaux はあらかじめ本の出版に備えて偽名を用意していた。「ソレルス」= “Sollers”、ラテン語の solus と ars、すなわち「全身、芸術」、作家ソレルスの誕生である。こうして陽の目を見た処女作はよく知られているように F. モーリャックとアラゴン(この 2 人は比喩的にヴァチカンとクレムリンと言い換えられる)の絶賛を浴び、ソレルスの名前が世に知られるようになるのである。『挑戦』は 1958 年にフェネオン賞を獲得している。

同じ年、上記の手紙をケロールに出す少し前に、いつものようにアリアンス・フランセーズの前を通りかかったソレルスは、その講堂で行われていた討論会の知らせの中に見知った名前を見つけた。フランシス・ポンジュ——。その後、Tel Quel 誌の歴史を語る際に欠かせない、友情と互いへの尊敬に支えられた 2 人の関係はこの日をもって始まったのである。ソレルスは彼の

学友のプロヴァンシエルおよび学友 J. クードルを通じて知り合ったポアルーヴレをポンジュに紹介する。このメンバーが Tel Quel 誌創刊の際のソレルス・グループを構成することになるのである。

### 1.1. 創刊前夜

Tel Quel 誌の創刊を担ったもう一つのグループの中心人物は、J.-E. アリエである。彼をソレルスに紹介したのも J. ケロールだった。こうして文学活動、あるいはジャーナリストとしての活動を開始したばかりの20歳から21歳のメンバーからなる2つのグループが合流することになったのだが、彼らの関係は最初からライバル意識をむき出しにしたものろいものだったようだ。アリエのグループのメンバーは J. R. ユグナンと R. マティニャンである。

1959年5月、スイユ社の P. フラマンがゴーサインを出し、かくして夏の休暇を挟んでソレルスとアリエは雑誌発刊に向けての詰めの作業に取りかかった。アリエが代表者に決り、1960年1月15日、契約書にサインがなされ、Tel Quel 誌はスタートしたのである。編集局はパリ6区、ジャコブ通り27番地だった。

### 1.2. 創刊号

Tel Quel 誌は創刊号から一貫して雑誌の名称“Tel Quel”の2語を含んだエピグラフによって始められている。それぞれの引用文には編集者の強い思い入れが込められているかのようだ。創刊号はニーチェである。

«Je veux le monde et le veux TEL QUEL, et le veux encore, le veux éternellement, et je crie insatiabement : bis! et non seulement pour moi seul, mais pour toute la pièce et pour tout le spectacle ; et non pour tout le spectacle seul, mais au fond pour moi, parce que le spectacle m'est nécessaire—parce qu'il me rend nécessaire—parce que je lui suis nécessaire—et parce que je le rends nécessaire.»

Nietzsche.<sup>8)</sup>

# TEL QUEL

Francis Ponge, *La Figue (sèche)*

Claude Simon, *La poursuite*

Jean Cayrol, *La presque île*

Jean Lagrolet, *L'écrivain désamorcé*

Boisrouvray, *Une vallée sous les nuages*

Philippe Sollers, *Requiem*

Pensez-vous avoir un don d'écrivain?

32 réponses à une enquête.

Virginia Woolf, *Le moment : soir d'été*

Jacques Coudol, *Le voyage d'hiver*

Jean-René Huguenin, *Adieu*

Jean-Edern Hallier, *Un visage à part*

Jean Thibaudeau, *L'attentat*

Renaud Matignon, *Flaubert et la sensibilité moderne*

Francis Ponge, *Proème*

*Albert Camus*

*Notes de lecture*

Printemps 1960

1

世界内存在である人間が永遠に世界を希求する——TEL QUEL、あるがままに。自分自身のために、あらゆるスペクタクルのために。自分がスペクタクルを、スペクタクルは自分を必要としているのだ——。ニーチェのこの言葉は絶えず挑戦し続けると同時に何ものにも組みししない、というソレルス達の意気込みの思想的拠りどころを示しているものであろう。だが創刊号に対する反響の中で、批判的だったものの一つがこのニーチェの言葉をエピグラフに掲げたことに対するものであったとも言われている。

以後、各号のエピグラフに取上げられた引用文には、ダンテ特集号の『神曲』、J. ポーランの提案による禅問答、およびヘルダーリン、デカルト、セリーヌ、サルトル、ブランショ、キルケゴール、ソシュール、クレー、聖アウグスティヌス、メルロー・ポンティ、アルトー、ジョイス等の文章がある。

### 1.3. 宣言<sup>9)</sup>

創刊号の巻頭はソレルスとボンジュが苦心して練り上げた宣言文が飾っているが、それは次のように始められている。

Chaque fois que la pensée, soumise à des impératifs moraux et politiques, a cessé d'être ce que nous attendons d'elle : le fondement de notre présence, sa claire et difficile expression par l'art ; chaque fois que cette pensée dévaluée s'est ainsi agitée autour des œuvres, trouvant à prêcher là où il suffisait d'aimer—et en silence ; (...). Les idéologues ont suffisamment régné sur l'expression pour que celle-ci se permette enfin de leur fausser compagnie, de ne plus s'occuper que d'elle-même, de sa fatalité et de ses règles particulières.<sup>10)</sup>

ここでは一般に言われているように、時代を支配していたとも言えるサルトルのアンガージュマンに対するアンチ・テーゼが宣言されているだけでなく、周辺にひしめく左右の夥しいイデオロギー、即ち実存主義・マルクス主義・スターリニズム・社会主義・コミュニズム、さらにはナチズム・ファシ



ズム等に対する脱イデオロギー宣言もうたわれている。芸術表現をそれ自身に、その本来の姿に戻すこと、芸術表現が本来の仕事に専心することを目指すように、と促しているのである。ここから Tel Quel 派は「新しい高踏派<sup>バルナシアン</sup>」という呼ばれ方をするようになるのだが、しかしこの宣言を突き動かしている動機が単なる美への憧憬にあるのではなく、自身の内なる表現への切実な欲求にあるのであり、更には後に引用するこの文の続きで表現活動における厳密で冷徹な新しい方法論を要求しているところからみても、単なる過去への反動的な立戻りではないことが明らかであろう。

引用文冒頭に現れる「思考」(“la pensée”)の語は M. プランショの mot clé であるとともに G. バタイユの著作の中心概念である。ソレルスを初めとする幾人かの Tel Quel のメンバー達は当時、バタイユの世界、殊に *L'Expérience Intérieure* (『内的体験』) に語られている世界に惹かれていた。脱イデオロギー宣言後、その足取りが芸術のための芸術へと向わなかったことの一因には、彼らがバタイユの矛盾と混沌に充ちた激しい内なる叫びを自分たちの中にも聞いていたことがあるのではないだろうか。

Ce qu'il faut dire aujourd'hui, c'est que l'écriture n'est plus conceivable sans une claire prévision de ses pouvoirs, un sang-froid à la mesure du chaos où elle s'éveille, une détermination qui mettra la poésie à la plus haute place de l'esprit. Tout le reste ne sera pas littérature.

Voilà ce mot de poésie lâché (que nous prenons, bien entendu, dans son sens large, englobant tous les «genres littéraires»)—et sans doute faut-il dire ce qu'il représente pour nous, la sensibilité que nous comptons y affirmer.

上の文中、“poésie”として広く捉えられているものこそは、バタイユが「詩への憎しみ」(“La Haine de la Poésie”)という逆説的な表現のもとに生涯追求したものに他ならない。

C'est, en somme, soumise à la découverte d'un monde (...), une naïveté armée. L'écriture, qui est un peu notre fonction vis-à-vis du monde extérieur, notre façon de le saluer, de créer entre lui et nous une connivence, une intimité, une amitié de plus en plus grandes, n'est, en définitive, qu'une entrée en matière. (...)

Sans doute rien n'est plus important vis-à-vis du monde, (...); sans doute rien ne mérite plus d'attention que ce décalage entre l'objet, le spectacle qui se trouvent devant nos yeux, (...), et la découverte (la sensation de découverte) brutale ou progressive de cet objet, de ce spectacle, où nous retrouvons, par la force d'une sensation particulière, l'intérêt que mérite ce monde, ce monde TEL QUEL, l'étendue infinie de sa richesse et de son possible. Et peut-être pourrions-nous qualifier de beau, oui, tout ce qui, par la complication harmonieuse de son architecture, par la logique mais aussi par l'étrangeté nécessaire de sa nature, nous force à réconcilier les contraires, (...). (...) Vouloir le monde, et le vouloir à chaque instant, suppose une volonté de s'ajouter la réalité en la ressaisissant et, plus qu'en la contestant, en la représentant.

「世界と我々の共謀」という時の“une connivence”の語にもバタイユの主要な概念“la complicité”（共犯性）との類縁関係を見ることが出来るだろう。

更にも上の引用文中の“ce monde TEL QUEL”、“le spectacle”、“vouloir le monde”等の表現からも分かるように、この宣言が先に引用したニーチェのエピグラフに呼応するものであることが見て取れる。“par la complication harmonieuse”、“par la logique mais aussi par l'étrangeté nécessaire de sa nature”、“réconcilier les contraires”という表現にはシュルレアリスムの影響を見ることも出来るだろうが、ここに彼ら独自の的方法論が提示されているとも言えるだろう。宣言は以下の文で結ばれている。

Et y a-t-il meilleure prétention que celle qui nous fait espérer réunir ici tout ce qui s'écrit—ou s'est écrit—de meilleur dans toutes les directions où il nous paraîtra bon d'avancer?

#### 1.4. レクイエム

ところで創刊号に掲載されたソレルスの作品は『レクイエム』である。新しい雑誌の船出を飾るにはあまりにも暗く重いタイトル——ここにソレルス独特の諧謔を読みとることも可能だろう。がしかし、テキストに添えられた献辞を読むことによってこの選択がソレルスにとって他に代えがたいものであったことが分る。タイトルの下には次のように書かれている。

*A mon ami Pierre de Provençhères, qui se taisait.*<sup>11)</sup>

ここにある名前プロヴァンシエルは、無名時代のソレルスが知り合ったばかりのF. ポンジュに紹介した友人の1人であり、将来共に新しい雑誌の編集を担うはずだった人物の名である。彼はアルジェリアで戦死していたのだ。

発刊当時、Tel Quel 誌を右翼的と決めつける非難の声は、その根拠として、ニーチェのエピグラフとともに編集方針に見られるアルジェリア戦争への無関心を挙げていた。しかしソレルスにとってのアルジェリア戦争とは、政治的・イデオロギー的な論議を越えて、何よりも大切な友の死をもたらした悲痛な体験だったのであろう。この事実の衝撃の大きさは、彼をして自分たちの最初の作品集に友の死を扱った小説を載せることを決断させたことに表われている。と同時に2年後、自身が召集された際に、あらゆる手段を使って執拗に兵役を拒否しようとする断固とした態度をとらせたことにも表れている。またソレルスは前年の1959年に交通事故で九死に一生を得てもおり、これら2つの体験はそれぞれ、ソレルスにあっては外部世界の出来事と内省的な思考とが密接な関係を作りなして創作のモチベーションへと発展していつているという事実を裏づけるものとなっていると言えるだろう。

友の葬儀の様子を象徴的に描き出したこの小品は、一方では「宣言」でう

たわれているエクリチュールの実験を試みたものでもあり、その意味では彼の同じ時期の他作品と密接な関連を持っている。

『レクイエム』では“je”と“elle”の2人“nous”が、親しかった兵士の葬儀に出席するために夜、列車で人影のない街に着く——物々しく儀式張って進行する葬礼、人形のような兵士たち——切れ切れに漏れ聞こえてくる死んだ兵士の勇気を称える言葉——«ce jeune chevalier...particulière audace...volontaire de la manière la plus périlleuse...lutte séculaire...exemple à suivre»——あれこれの宗教上の手続き——葬儀後、残った僅かな人々とともに突然ぽつんと取り残された棺と三色旗、《Souvenir français》の文字——墓まで運ばれ紐で素早く墓穴の中に下ろされる棺——再び帰りの列車の座席に背筋を伸して座っている“elle”——彼女の手に握りしめられた1枚のカラー写真——カーキ色の軍服を着た細面の無帽の兵士が岩に腰掛け、手帳に何かを書き付けている——よく晴れた日。彼の腕の時計が丁度午後1時を指し示している。

この間に“elle”が発する言葉、《Allons voir》、《Le voilà》、《Pauvre...》、《Tu pleures》、《Il faut que j’y aille. Attends-moi.》、そして部屋中に響き渡る心の叫び—《Non, cela ne sert à rien, il n’y a rien que ces choses provisoires, sans raisons, sans rapports...Lui savait bien, il se taisait. Que dire de ce silence?》、<sup>12)</sup>これが作品中のセリフの全てである。

“elle”の靴音が鳴り響く以外には静寂が立ちこめる夜の街路、“elle”のセリフは、トーキー映画におけるそのように場面から浮き上がって聞こえてくる。屋外の闇と建物の明りが照し出す別世界のコントラスト。兵士の写真に写し取られた陽光と陰。加えて繰返し強調される様々な色、即ちメダルの赤いリボンと室内の植物の緑、黄色い扉と黒いクッション、三色旗の赤、白、青等々。58年に出版されて絶賛を博したソレルスの長編第一作 *Une curieuse solitude* (『奇妙な孤独』) 以来、色の描写はソレルス作品の重要な要素の一つになっている。音と静寂、光と闇、様々な色と各種の補色、これ等の要素は作品の中でそれぞれ独立して主張し合う。“nous”、“elle”と代名詞で呼ばれる抽象化された主人公達によって展開されるストーリー、というよ

りはむしろ細部に拘った情景描写の連鎖ともいべき形での表現は、翌年発表されメディンス賞を受賞した作品 *Le Parc* (『公園』) で一層の発展を見ることになる。その『公園』においてもやはり、後に戦死する“il”がオレンジ色のノートに何事かを書きつけている様子が繰り返し描写されるが、この人物もまた作者にとって具体的な存在であることが作中で暗示されている。

ソレルス作品に見られる細部描写や、人物の抽象化などの客観的な手法にヌーヴォー・ロマンの影響を見ることがよくなされるが、両者の大きな相違点は、このような表現に作者を向かわせる内的契機の強度の差にあるのではないかと思われる。ソレルスの小説には現実が潜んでいる。ソレルスは本気でフィクションを信じているのかどうか——。自身の交通事故の経験も幾つかの作品に繰り返し描かれているが、それ以外にもその後の作品は自伝的な色合いを一層強めている。この辺りが *Jalousie* (『嫉妬』) や *Dans le labyrinthe* (『迷路の中で』)、*L'année dernière à Marienbad* (『去年マリエンバードで』) のロブ＝グリユと決定的に違うところではないだろうか。

### 1.5. その他の記事

Tel Quel 誌創刊号は、細心の注意を払ってバランスを考えて編集されたと言われるが、例えば編集者の1人だったユグナンが「半ばしくじったカクテル」<sup>13)</sup>と『日記』の中で揶揄しているような荒削りな側面もあるようだ。創刊号のライン・アップは、冒頭の「宣言」にF. ポンジュの詩とJ. ケロールの作品が続き、その後に編集者6人の作品その他、およびアンケートが順不同で続く体裁になっている。クードルとユグナンは発表予定の小説の抜粋を掲載し、マティニャンはフローベル論を載せている。このマティニャンの評論は、「この惨憺たる創刊号の中であって唯一の救い」とCombat 誌の書評に書かれたという。<sup>14)</sup>

6人の作品の他には、編集者のヌーヴォー・ロマンへの関心の強さを象徴するようにC. シモンとJ. ティボドーの作品が並び、更にヴァージニア・ウルフの翻訳、ソレルスが書いた無署名のカミュ論が掲載されている。Tel Quel のメンバーは、サルトル、カミュのいずれにもはっきりした共感を寄

せてはいなかったようだが、事故死したばかりのカミュに捧げた一文は、これを彼らの敬意の表われと見てよいだろう。一方、中程に挿入されているアンケートは「あなたは自分に作家としての才能があるとお考えですか？ またその根拠は？」という人を食った質問とそれに対する31人分の返答を載せたものである。これらの答えがなかなか興味深い。例えばクロード・シモンは「才能 (“don”) という言葉は透視能力を指すようでありあまり好きではない。書くという方法で他人よりも容易く語ることの出来る能力を持っているとでも言った方が良いのではないかと答えている。ロブ＝グリエは「否」と答えて、フィガロ・リテレールの記者がかつて彼の才能に関して疑問を呈したことを理由に挙げている。L.-F. セリーヌは「快樂の追求者は書く必要なんかない。作家にこんな質問をすることは！」と切り返し、A. P. マンディアルグは「皆さんは新しい雑誌を始められたのだから、この質問に答えるべきなのはあなた方ではないでしょうか？」と皮肉っている。そしてシュルレアリスト、P. スーパーのはずむような返事、「幸いなことに私には才能があります。まず第一に私は詩人です。それに私は自由に対して深い愛情を抱いています。ところで私にものを考え、自由に生きることを可能にしてくれるのは詩です。私はしばしば自分に作家としての才能を感じます。詩を書くことへの抗いがたい必要性を感じます。ちょうど息をするのと同じように。」<sup>15)</sup>

雑誌の最後にはシュルレアリストの遊びを真似て、アルジェリアにいるポアルーヴレを除くメンバー全員の採点による最近出版された本の得点表を載せている。それによるとロブ＝グリエの『迷路の中で』、ブランショの『来るべき書物』は高得点、サガンの『ブラームスはお好き？』はあまり得点が高くないという結果になっている。<sup>16)</sup>

## 2.0. 周辺の状況と Tel Quel 誌の位置取り

1960年2月18日、Les Lettres françaises 誌は Tel Quel 誌発刊の数週間前にソレルス、アティエ、ユグナン、クードルの4人にインタビューをしている。<sup>17)</sup>アラゴン率いるコミュニストの文芸誌が最初に Tel Quel グループにインタビューを行ったのである。当時はサルトルの Les Temps Modernes

誌の他にも M. ナドーの Les Lettres Nouvelles 誌、戦時中ドリユ・ラ・ロ  
 シェルの手に渡っていた雑誌を取り戻して再出発した J. ポーランの  
 Nouvelle N. R. F. 誌、J. ローランの La Parisienne 誌等があり、雑誌の群  
 雄割拠の様相を呈していた。こうした中であって Tel Quel 誌の出発は困難  
 を極めていたと言うことが出来るだろう。創刊号に対する批判にもイデオロ  
 ギー的なものを別としても、例えば France-Observateur 誌の B. フランク  
 による次のようなものがあった。

Le premier numéro de la revue Tel Quel est un échec. C'est illis-  
ible.<sup>18)</sup>

ここで使われている“illisible”という言葉こそは、ソレルスの作品に対  
 して以後頻繁に使われる表現でもある。それはさておき、こうした非難に対  
 して Tel Quel 誌を擁護する側にはソレルスとの間に長年にわたって信頼関  
 係を築いてきた数々の人物の名前が見られる。アラゴンの他にも F. ポン  
 ジュ、J. ケロール、J. ポーラン等々である。J. ポーランは N. R. F. 誌上で、  
 Tel Quel 誌に《grand succès et longue vie》を願う<sup>19)</sup>、と熱く語っている。

サルトルのアンガージュマンに同調せず、新高踏派とも右翼的とも言われ  
 ながらも коммуニスト・アラゴンに庇護され、もと коммуニストであったポ  
 ンジュと歩みを共にするという Tel Quel 誌の矛盾に充ちた姿勢はそのまま  
 ソレルス個人の周囲に対するスタンスの取り方でもある。こうしたことから  
 Les Éditions de Minuit 社ほど熱心ではなかったにしてもやはりアルジェリ  
 ア独立に同情的だった Seuil 社が、ソレルス達の雑誌を出版することに驚き  
 を表す人もいたようである。

ドイツ占領時代から戦後を経てアルジェリア戦争に至る動乱の時代と、一  
 見穏やかに見える冷戦後のポスト・モダンの時代との間に挟まれ、左右両翼  
 の文化人達の競合が激しい中であってまれ続ける Tel Quel 誌の立場が、  
 いずれにも組みせず、しかも場合によってはそれぞれを自らに取込む、とい  
 う詐術に充ちた態度をとらせたとも言えよう。相反する 2 者の間に跨がる存

在の中間性——ソレルスが1963年に発表した作品のタイトルが *Intermédiaire* であったのも多分に示唆的である。

独自の立場の獲得を目指して模索し、挑戦し続ける Tel Quel 誌とソレルスは、ニーチェの言葉を指標にかつて誰も歩んだことの無い道に足を踏み出したとも言える。後になって次のように総括されるように——。

Les jeunes écrivains rassemblés autour de Philippe Sollers choisissent de ne pas choisir, renvoyant dos à dos,—et en un geste déjà très telquelien—les adversaires de cet affrontement rituel. Ils affirment ne vouloir ni mobiliser la littérature, ni travailler à la désarmer. Avec Ponge, ils prennent le parti pris d'un monde qu'ils réclament «tel quel», selon la formule nietzschéenne placée en épigraphe du premier numéro.<sup>20)</sup>

## 2.1. 内部抗争

Tel Quel 誌のメンバーは自己主張の強いライバル同士の集まりであり、このような集団が波乱無く活動を続けていくことは当初から困難だったようである。まず最初にユグナンがロマンティズムに向かったことで他のメンバーとの間に軋轢を生じ、早くも創刊の年のうちに除名された。ユグナンはその後間もなく、奇しくもソレルスと同様に交通事故に遭い、26歳の若さで亡くなった。この *La Côte sauvage* (『荒れた海辺』) の作者は Tel Quel 誌上に唯一回登場しただけで、永久に姿を消してしまったのである。この間ソレルスは61年には大病を患い、62年には徴兵を逃れるための必死の画策をしていた。喘息の持病が徴兵猶予の条件を満たさないと分るや精神病を装い、その際受けたテストの様子を *Intermédiaire* に書き綴るということをしている。Tel Quel 誌ではユグナンが去った後、新たに M. マクサンスと M. ドゥギー、続いて J.-L. ボードリー、M. プレネと D. ロッシュ等が加入し、更にマティニャンとマクサンスが追放されるというめまぐるしい出入りが続く。



終いには編集長であったアリエまでもが追放され、クードルとポアルーヴレは文学を捨てることになる。こうして当初からのメンバーはソレルス1人になったのである。

## 2.2. ニューヴォー・ロマンへの関心と決別

エクリチュールの実験を目指していたソレルス達は当初からニューヴォー・ロマンに強い関心を示していた。またロブ＝グリエの姿勢、例えば彼がL'Express誌に寄せた記事について述べられた次のような文を読むとき、これが「宣言」に述べられていることと軌を一にするものであることが分る。

Dans ces textes, le chef de file du nouveau roman cherchait à se démarquer clairement du réalisme socialiste et de toute conception strictement politique de la littérature. Ramassant sa vision en une formule, il déclarait dans «Nouveau roman, homme nouveau» en 1961: «Le seul engagement possible, pour l'écrivain, c'est la littérature.»<sup>21)</sup>

だが前にも述べたような両者の間の異質性は、いずれは互いのベクトルの違いとなって表れざるを得なかったようだ。1964年夏号に掲載された『ニューヴォー・ロマンのために』の書評で思いがけず、遠回しな表現に隠されたソレルスの明確な批判にぶつかって動揺したロブ＝グリエは、手紙に次のように書いて送るしかなかった。

Je lis par hasard votre petite note sur *Pour un nouveau roman*. Tiens...Tiens...! On me laisse tomber! (...) Mais tant pis. Nous avons fait un bout de route ensemble. Il ne me reste plus qu'à vous souhaiter bon voyage.<sup>22)</sup>

ニューヴォー・ロマンとの決別は以後、ソレルス達をM. フーコーやR. バル

トに一層近づける契機ともなっている。

### 3.0. 掲載記事のヴァリエーション

Tel Quel 誌各号はそれぞれ、創作、評論、詩、翻訳、書評その他からなっている。第2号にはソレルスの *Introduction aux lieux d'aisance* (『雪隠考』) が掲載された。学生時代、授業中に書いたというこの思弁的な省察に充ちた小品のタイトルは、彼が敬愛するバタイユが初期の『眼球譚』を書く際に用いた偽名“Lord Auch” (便所の神) を思い起させずにはおかない。同じ2号には後に Tel Quel 誌のメンバーとなる J. ティボドーと J. リカルドーが執筆しており、またソレルスによるロブ＝グリエについての論文も載っている。5号にはロブ＝グリエの *L'Année dernière à Marienbad* (『去年マリエンバードで』) が掲載されており、この時期の両者の緊密だった関係を窺わせる。5号にはバタイユの *Les Larmes d'Éros* (『エロスの涙』)、ソレルスの *La lecture de Poussin* (『プッサンを読む』) が載っている。7号には“La littérature aujourd'hui” (今日の文学) シリーズの1回目、R. バルトの文が載っており、後にメンバーとなる J. L. ボードリーが初めて執筆している。同じ号には M. ビュートル、G. ジュネット、V. ラルボー、V. セガレンも執筆している。8号には後にメンバーとなる M. ドゥギー、M. ブレネが執筆しており、P. クロソフスキーも評論を載せている。9号には J. P. ファイユと M. マクサンスが初めて登場する。また“La littérature aujourd'hui” シリーズ2回目が N. サロートによって書かれ、ソレルスの *L'intermédiaire* が掲載されている。10号にはバタイユが死の直前にまとめた *Conférence sur le Non-Savoir* (『非一知についての講演』) が掲載されている。11号には“Littérature” シリーズ3回目が M. ビュートルによって書かれ、ソレルスは *Background* を載せている。12号には J. グラックがユグナンの死を悼む記事を寄せている。13号に D. ロッシュが初めて登場する他に、14号には R. カイヨワ、P. ブーレーズも書いており、“Littérature” シリーズ4回目はロブ＝グリエが書いている。15号にはソレルスの *Logique de la Fiction* (『小説の論理』) が載っている他、M. フーコー、A. アルト一等

が執筆している。17号ではフーコーの司会による小説についての討論会、詩についての討論会がそれぞれ掲載されている。18号ではM. カニングハム、M. ロベールが、20号ではJ. デリダが書いている。

以上のように執筆陣は絵画、音楽、ダンスの各ジャンルへと広がっており、芸術表現を幅広く探求しようとするソレルス達の意欲が伝わってくる。これを裏付けるものとして掲載記事をジャンル別に数字で表したのを見ると以下のようになっている。

アヴァン・ギャルド：43／ヌーヴォー・ロマン：35／文学：46／詩：61／シュルレアリスム：4／フランス文学：17／外国文学：49／文学理論：83／哲学：13／セミオロジー：2／言語学：1／精神分析論：3／民族学：4／中国：3／時事：10／絵画：26／映画：8／音楽：2／演劇：5／ダンス：3（1960年1号から1965年23号まで。Tel Quel 誌編集委員会作成の資料による。）

### 3.1. Tel Quel の書籍出版

Tel Quel は又、雑誌と平行して夥しい数の単行本を刊行している。ソレルスの編集者としての才能が発揮された事業は成功したと言えるようである。第1回の出版はソレルスの *Intermédiaire* であった。

Tel Quel から単行本を出版している作家を挙げると、多いところではF. ポンジュとG. ジュネットが8冊ずつ、C. オリエが6冊、J. ケロール他の5冊、M. マクサンス、M. ビュートルが4冊、それにP. クロソウスキー、T. トドロフ、R. バルト、M. フーコー、J. デリダ、M. ドゥギーの3冊が続く。件数は少ないが他にG. バタイユ、J. L. ボルヘス、ウンベルト・エコ、J. ジュネ、J. グラック、V. ラルポー、H. ミショー、J. ポーラン、J. P. リシャル、A. ロブ＝グリエ、M. ロベール、N. サロート、V. セガレン、C. シモン、J. スタロバンスキー、ウンガレッティ、P. ヴァレリー、F. ヴァール等がTel Quel から本を出している。文学以外のジャンルではP. ブーレーズ、J. ケージ、M. カニングハム等の名前が見られる。<sup>23)</sup>これらの顔ぶれは概ねTel Quel 誌の記事や作品の執筆者、あるいはその作品がTel Quel 誌上で論評の対象となった作家達でもある。

#### 4.0. Tel Quel の役割

En France, on le sait, l'université dans la seconde moitié des années soixante, s'est passionnément saisie du «telquelisme», avant de s'en détourner avec violence ou condescendance.<sup>24)</sup>

この文は Tel Quel に対する周囲の典型的な反応の一つを端的に表していると言えよう。いかなるイデオロギーにも取込まれることなく、いかなる社会的な動きからも距離を置き、決して懐柔されない一方で、常に挑戦し、アヴァン・ギャルドであり続けようとする事、——このような態度は恐らくは欺瞞でしかあり得ないかも知れない。だがこうした道を選んだ以上は引返すわけにはいかないのだ。従ってそれ以後はまさしく戦争であろう。戦場における本来のアヴァン・ギャルドの働きが要求されるのだ。これが Tel Quel が選んだ道である。方向性の違いから、あるいは雑誌の運営上の問題から、身内を次々に切っていく痛みにも耐えながらも妥協せずに、様々な定義付けやレッテルを貼ろうとする動きと戦い、しかも自らの主張を現実の作品中に実現していくこと、このために取った手段が詐術、策略でもあり、生き延びるためにとった方法が変節でもあっただろう。これらはソレルス本人の著作、および表現活動にしばしば用いられる言葉である。エクリチュールの実験を、芸術表現の探求を続けていくための、そして雑誌を継続するための必然であったということであろうか。

#### 4.1. 発展にむけて

Tel Quel 誌はその後、J. P. ファイユ、T. トドロフ、J. デリダ、J. ラカン、M. フーコー、J. クリステヴァ等の参加や協力を得て大きく飛躍すると同時に、その変節振りも次第に振幅が大きくなっていくのが見られる。しかし例えば、創刊以前からの協力者 F. ポンジュは、1965年ラジオのインタビューで、現在もっとも優れた雑誌は何か、と聞かれて次のように答えている。

Pour parler concrètement, la *Nouvelle Revue française* ne cesse de dégénérer, *Le Mercure de France* aurait plutôt tendance à s'améliorer. *Les Temps modernes* me paraissent de plus en plus naïfs et ennuyeux. Non, la meilleure revue, il n'y en a qu'une, c'est celle que publient aux Éditions du Seuil Sollers, Pleynet et leurs amis, et dont le nom est *Tel Quel*.<sup>25)</sup>

時にはその過激な方針によって物議を醸しつつも、この様な揺るぎない信頼の軸に支えられて、時代にもまれ続けながらもソレルスと *Tel Quel* は生き続けることが出来たのだろう。

(この項、了)

## 註

1) この20余年について、例えば *Tel Quel* 誌に遅れて参加したジュリア・クリステヴァは次のように述べているが、この様に反動的で困難な時期とも捉えられる20年間を通じて、主張を持った一つの雑誌が生き延びることは容易ではなかっただろう。

La Restauration actuelle dont nous faisons l'expérience dans ce pays n'est pas simplement un glissement de la gauche vers la droite, mais une vague conservatrice générale affectant toutes les démocraties occidentales et, jusqu'à un certain point, tous les gouvernements. Dans la sphère culturelle, et particulièrement en France, cette Restauration se manifeste comme un retour aux valeurs traditionnelles nourries de nationalisme, mais aussi comme une peur de la pensée critique qui, ainsi que nous l'avons compris après coup, a proprement terrorisé les institutions universitaires, éditoriales et journalistiques, entre les années 60 et les années 80. (強調筆者) (Julia Kristeva, *Un temps d'enthousiasme serein*. Entretien in *De Tel Quel à L'Infini : L'avant-garde et après?* Colloques de Londres et de Paris, mars 1995, Éditions Pleins Feux, p. 291.)

2) J.-J. Brochier, *Tel Quel, du nouveau roman à la révolution culturelle*, in *Magazine Littéraire* 65 (June 1972), p. 10. Daniel Marx-Scouras, *The Cultural Politics of Tel Quel*, The Pennsylvania State University Press, 1996, p. 9からの孫引き。

3) Patrick Ffrench, *The Time of Theory : A History of Tel Quel*, Oxford University Press, 1995、および Philippe Forest, *Histoire de Tel Quel*,

- 《Fiction & Cie》, Éditions du Seuil, 1995. 本稿中、ソレルスと Tel Quel 誌にまつわる事実に関する記載は、特に出典は明記していないが概ね、このフォレストの著作に依っている。
- 4) *L'Infini* 49/50, Éditions Gallimard, 1995, p. 3. 強調筆者。
  - 5) これはフランス文壇の伝統的なシステムであるようだ。(辻仁成とフィリップ・フォレストの対談『エキゾティズムから逃れて』「ユリイカ」13年10月号。) この中でフォレストはソレルスも文壇と妥協せざるを得ない、と言っている。ただ、自身がかつて十分にこのシステムの恩恵に浴しているソレルスは、むしろ積極的に出版活動に協力しているようにも思える。
  - 6) P. Forest, *Histoire de Tel Quel*, *op. cit.*, p. 17.
  - 7) *ibid.*, p. 18. 強調筆者。
  - 8) *Tel Quel*, numéro 1, printemps 1960, Éditions du Seuil, p. 2. 強調筆者。
  - 9) この宣言に対する反応について、後に F. フォレストは次のように書いている。(…) dont les commentateurs ont beaucoup souligné l'imprécision et la faiblesse théorique : revendication vague des pouvoirs de la littérature, a-t-on ironisé. (P. Forest, *De Tel Quel à L'Infini*. in *De Tel Quel à L'Infini*, *op. cit.*, p. 169.)
  - 10) 本引用および後続の「宣言」からの各引用は *Tel Quel*, numéro 1, *op. cit.*, pp. 3, 4. 強調筆者。
  - 11) *ibid.*, p. 33. 強調筆者。
  - 12) *ibid.*, pp. 33, 34, 35, 37. 強調筆者。
  - 13) P. Forest, *Histoire de Tel Quel*, *op. cit.*, p. 67.
  - 14) *ibid.*, p. 61.
  - 15) *Tel Quel*, numéro 1, *op. cit.*, pp. 40, 43.
  - 16) *ibid.*, p. 94.
  - 17) Danielle Marx-Scoura, *The Cultural Politics of Tel Quel*, *op. cit.*, p. 48.
  - 18) P. Forest, *Histoire de Tel Quel*, *op. cit.*, p. 68. 強調筆者。
  - 19) *ibid.*, p. 68.
  - 20) P. Forest, *De Tel Quel à L'Infini* in *De Tel Quel à L'Infini*, *op. cit.*, p. 169. 強調筆者。
  - 21) P. Forest, *Histoire de Tel Quel*, *op. cit.*, p. 90. 強調筆者。
  - 22) *ibid.*, p. 176.
  - 23) Niilo Kauppi, *The Making of an Avant-Garde : Tel Quel*, Mouton de Gruyter, Berlin・New York, 1994, pp. 374-387. 著者は刊行期間全体を5つの時期に分けているので、その分類による第1期、1960年から1967年まで(1号から32号まで)のものを対象とした。
  - 24) Philippe Forest, *De Tel Quel à L'Infini* in *De Tel Quel à L'Infini*, *op. cit.*, p. 166.
  - 25) P. Forest, *Histoire de Tel Quel*, *op. cit.*, p. 189.



アリエ（左端）、クリステヴァ（左から4人目）、ソレルス（右から2人目）他の Tel Quel 誌のメンバー